

はじめに

“ムーシールド”の歩みと臨床思想の系譜

1985年、第44回日本矯正歯科学会大会。一般口演「機能的矯正装置による反対咬合者の治療について」を発表した。振り返れば、ムーシールドの歩みは、そこから始まっていた。

示しなかったのは、単なる一症例の報告ではなかった。1つの装置の技術的紹介でもなかった。反対咬合を、成長期の機能の中で捉え直すこと。筋機能と顎顔面発育の関係を見つめること。そして、早期初期治療の可能性を切り拓くこと。それが、私の中でようやく言葉になり始めた時期であった。

その背後には、目の前の子どもたちがいた。反対咬合の子どもたち。まだ幼く、これから顔も顎も歯列も育っていく子どもたち。その成長の道筋を、どのように正しい方向へ導くことができるのか。もっと早く、もっと自然に、もっと機能に寄り添う治療方法があるはずだ。その思いが、長く胸の内にあった。

臨床の限界にぶつかるたびに、問いは深くなった。“もっとよい方法はないのか”。“この子の成長を、もっと早い時期に軌道修正できなかったのか”。その問いが消えることはなかった。

やがて、その問いは1つの形を取り始めた。スプリント。上口唇圧の排除。舌を挙上するエリア。そこにあるのは、単なるデザインではない。デザインの奥に、機能があった。機能の奥に、発育があった。そして、発育の奥に、子どもたちの未来があった。

それゆえに、“ムーシールド”という名は、単なる製品名ではない。私にとって、それは臨床の問いそのものに付けられた名であった。反対咬合を、歯だけの問題としてではなく、ひとりの人間として、成長発育の全体の中で見ようとする臨床思想。その思想に、1つの名が与えられたのである。

反対咬合は、形だけを見ていては見えてこない。前歯が逆に噛んでいる。その現象だけを見ていても、子どもの中で何が起きているのかはわからない。口唇の力。舌の位置。頬の圧。呼吸。嚥下。姿勢。さらに遺伝的な背景。さまざまな要因が絡み合いながら、一人の子どもの咬合は形づくられていく。

だからこそ、治療もまた、単に歯を動かすという視点だけでは足りない。機能に働きかけなければならない。成長発育に寄り添わなければならない。治療とは、子どもの体が本来持っている発育の力を、正しい方向へ導く営みである。恩師・深田英朗教授が語られた「歯だけを見ず、一人の人間を診なさい」という言葉が、いつも私の中にあった。

1985年、日本矯正歯科学会で、その思想は芽を出した。そして2001年、AAO/Toronto(米国矯正歯科学会)で、その思想は“MUH SHIELD”という名をもって、世界に向けて名乗りを上げた。

名前を持つということは、その装置が、他と区別される存在として立ち上がるということである。そこに理念があり、独自性があり、臨床の蓄積があることを、自ら示すということである。

この歩みを語る時、故・吉見健司氏(バイオデント社)、そして Dr. William “Bill” MACHATA, (American Ortho. Inc.) の存在に触れないわけにはいかない。新しい臨床概念が国際的な場へと歩み出るとき、それは一人の力だけで成し遂げられるものではない。そこには、その理念を理解し、支え、場を整え、背中を押してくださる人々が必ずいる。

“YC3”という名も、そうした出会いの中から生まれた。名付け親は Dr. “Bill” MACHATA, である。“YANAGISAWA, Class 3”。その略称として“YC3”が与えられた。その名を聞いたとき、東京郊外の臨床の現場で生まれた問いに、英語の名を与えられ、世界へと歩み出して行くことを、静かな感慨をもって受け止めた。

その問いは、2002年、AAO/Philadelphiaで“MUH SHIELD/YC3”の名をもって、さらに明確に世界の前に立つことが出来た。その後も、EOS(欧州矯正歯科学会)では、Helsinki, Finland、Portorož, Sloveniaの場で発信が続けられた。また、アジアの国々からも講演の依頼を受けた。

そして2005年、日本歯科医師会より、“ムーシールド”は教育VTR・CDとして出版された。その概念と製作方法を広く歯科医療の現場に伝える意味があった。臨床の中で生まれた問いが、国内外の学会発表を経て、教育資料として、広く歯科医師らに共有される段階に至った。

東京郊外の小さな診療室で生まれた問いが、やがて国際的な知の地平へと届いて行く。その道筋を、“ムーシールド”は静かに、しかし確かに歩んできた。そして今日、すでに21万症例分を超える“ムーシールド”が臨床の場で用いられてきた。その事実、この装置が単なる一考案にとどまらず、多くの子どもたちの成長発育に寄り添う臨床思想として受け止められてきたことを物語っているのではないだろうか。

1つの臨床装置が本当の意味を持つのは、それが単なる既製品として存在するときではない。その背後に、一貫した臨床思想があり、確かな治療理念が息づいているときである。確かに、装置の形は模倣できるかもしれない。しかし、その装置を生み出した問いまでを、模倣することは容易にはできない。

なぜ、この子どもに、今、この治療が必要なのか。どうすれば、より自然に、より負担少なく、より成長発育に即した治療ができるのか。その問いは、診療室の中でしか生まれえない。“ムーシールド”は、そのような問いの積み重ねの中から生まれてきた。

1985年、日本矯正歯科学会で芽を出した思想は、2001年 AAO/Torontoで“MUH SHIELD”として世界へ掲げられ、2002年 AAO/Philadelphiaで“MUH SHIELD/YC3”としてさらに歩み出し、2005年には日本歯科医師会を通して、その概念と製作方法が広く伝えられた。

“ムーシールド”の歩みは、1つの装置の来歴を語ることにとどまらない。日本発の臨床思想が、子どもたちの成長に寄り添いながら、世界の学術空間において固有名詞をもって立ち上がった。そのあるべき位置を確認し続ける歩みとも言えるのではないだろうか。

2026年6月 柳澤宗光